

アンナ・ゼーガース『死者はいつまでも若い』における

ナチズムと Kommunismus、反ナチズムの相克

——ベルリン周辺の一農村を中心に——

中原 綾

序 ——研究意義と問題の所在、分析視角——

本稿で取り上げるアンナ・ゼーガースは、ドイツ民主共和国 DDR の著名な作家としてその名を馳せた大家であった。現代日本でも、岩波文庫で『第七の十字架』が復刊され、2019年には亡命文学『トランジット』を下敷きにした映画「未来を乗り換えた男」がリリースされた。しかし、これが彼女の再評価につながるかといえば疑問が残る。その主な作品が翻訳されたのは、3、40年前がピークであったし、戦前に翻訳されて、そのままになっている作品¹すらある。また、初期の代表作とされる長編 „Der Kopflohn“ (『首にかけられた賞金』) や、後期の長編 „Das Vertrauen“ (『信頼』) は未だに定訳がない。なによりも、DDR 期の作品は忘れられたままなのだ。そして、日本の研究史上では、2000年代に発表された彼女に関する論文は数本のみで、これもまた3、40年前の論文が主である。

これはいったいどうしたわけであろうか。ゼーガースは、ナチズムの告発など大変な仕事をしてのけた大家である。しかし、本国ドイツでの事情は違うかもしれないが、少なくとも日本においては、彼女の作品は作家の死と共に葬られたかのようである。本稿では、農業史やドイツ史の研究蓄積をもとに、『死者はいつまでも若い』の新しい解釈を試みたい。

本稿で取り扱う人物は、主に農民と農業労働者である。従来『死者はいつまでも若い』を論じた論文では、労働者階級の視点で分析したものはあっても、農村については、農民ヴィルヘルム・ナードラーに少し紙幅が割かれるくらいであった。本稿で取り上げる、季節需要に応じて働く「日雇い農業労働者」に準ずる存在でのちにドイツ共産党 KPD の農村活動家となるパウル・シュトロベールについては、従来の日本における先行研究では、管見の限り論じられていない。ドイツのゼーガース研究の第一人者 Hilzinger も、彼について深く論じることはしていない。この研究史上の欠陥は、当時のドイツにおける農業労働者の実態が、現代では理解されにくいことが一因であろう。だが、この作品の主要モチーフ

¹ アンナ・ゼーガース (武田昌一・本野亨一訳) : フルショヴォの農民 [『Die Kastanien』京大独逸文学研究会、1933、1月号]

フの一つである、 Kommunismus と反ナチズムをも論じるには、ぜひともシュトロューベル、つまり農業労働者を取り上げねばならない。

第1章では、ナードラーの描写と人物造型から、ナチスに盲従する国粹主義者の姿を追う。第2章では、現代の読者にはなじみが薄いであろう、農業労働者という立場について簡単に紹介した上で、 Kommunismus を奉じる農村活動家としてのシュトロューベルを分析する。第3章では、シュトロューベルの活動の様子を手掛かりに、当時の農村における共産主義的アジテーションの実態を、熊野直樹の論文を基に明らかにする。その上で、ユンカー（この作品では、フォン・チーゼン男爵に当たるであろう）を長とする国粹主義団体の幹部ナードラーや突撃隊によって、なぜシュトロューベルが虐殺されたのかを考察した後、この出来事から炙り出されるナチズムと Kommunismus、反ナチズムの相克を、ナードラーの弟クリスティアンの視点を通して分析することにしよう。そして、結章で、本稿での考察を終えたうえでの総括として、この作品の謎めいた『死者はいつまでも若い』というタイトルに一つの意味を与え、ゼーガースの再評価を試みたい。

1 ヴィルヘルム・ナードラーとパウル・シュトロューベル

1.1 ナチス盲従の国粹主義者、農民ヴィルヘルム・ナードラー

この作品では、ヴァイマル共和国末期・ナチス時代のドイツの農民代表として、ヴィルヘルム・ナードラーという人物が描かれる。彼は、ベルリン周辺の村に住む農民で、平穏な百姓仕事を嫌い、軍に志願して下士官となった。そして、デーゲンハルト中隊長や、ユンカーらしきフォン・チーゼン男爵といった村の旦那、やがてヨーゼフ・ゲッベルス始めナチスに心酔し、常により強い権力を握る主人を求めて生きる権威主義者であり、戦争賛美者である。彼は、戦争で得た勲章で飾られた名誉、賛美、他者からの羨望や、強い権力をふるう自分を夢見る。「彼は昔から、農民というよりはむしろ、血の中深くまで兵士だったのだ」² という表現から、彼の兵隊根性が読み取れる。

あのカップ一揆に加わったのも、「自分の土地を持つ主人」³ になるためであり、「ベルリンに進撃して赤の奴らを追っ払う」⁴ と考えていたためである。ここで、はっきりと作品中で、ナードラーが共産主義を奉じる一派には与しないことが示され、のちにシュトロューベルを虐殺する伏線となっている。

彼は、カップ一揆失敗後に、しばらく村でくすぶっていたが、やがて、村での権威を高

² Anna Seghers: *Die Toten bleiben jung. Gesammelte Werke in Einzelausgaben in Band VI*. Berlin (Aufbau Verlag), 1976, S. 444. 以降、特に註を付さない限り、当該作品は頁数のみ記す。

³ S. 103.

⁴ Ebenda.

め、田舎の国粹主義団体の幹部としてのし上がっていく。⁵ まず、チーゼン男爵が座長を務める「在郷戦争参加者愛国クラブ」という団体の幹部になる。それから、村一帯を含めた組織の「愛国農民クラブ」という団体の会長になる。この団体の代表として、彼は湖畔のホテルへ通うのだが、ここはドイツ将校団・鉄兜団⁶の幹部たちのピクニックの目的地であり、彼がのちにナチスの手先、突撃隊と組んでシュトローベルを殺害する未来を暗示する。

だが、彼のチーゼン男爵に対する崇拜熱もやがて衰える。それは、彼がゲッベルスの演説を聞いたときに、男爵もまた演説に聞き入る姿を見たからであった。

ナードラーは、あの童話に登場する巨人、常に最も強い者に仕えたいと思い、いつも強い主人からもっと強い、以前の主人がその前に屈従する主人へと、主をくら変える巨人に似ていた。⁷

ここで言及されている「童話の巨人」は、おそらくグリム童話の下男を務める巨人である。これは彼の性格をよく特徴づけた一文である。

しかし、彼はゲッベルスの演説を聞いてナチスの新しい思想には触れたが、まだチーゼン男爵を見限ることができない。それは、新思想だけではなく、「血と肉によってできていて、手で触れることができる人間」⁸を要したからであり、これがヒトラーを指すことは明白である。

やがて彼は、ハルムスという人物にもひかれていく。ハルムスは、突撃隊の若者を始め、村の人々を支配する人物であり、彼は、ハルムスのみが生殺与奪の権力を与える、と思っている。そして彼は、ハルムスの命令で村の突撃隊の青年を駆り出すことになったのであった。ここに至って、彼のナチスとの結びつきが鮮明に描き出される。その後、大会で負傷した彼は、チーゼン男爵とハルムスの見舞いを受けて、得意になるのであった。

これらの経緯を経て、作中で第二次世界大戦が勃発する。戦争が始まって以来、彼は落

⁵ 山口定は、「運動としてのファシズムの一般的特性」として、運動の指導者層は「第一次大戦の落とし子としての『軍人くずれ』が中心」であったとしている。山口定：ファシズム（岩波現代文庫）、2006、26頁。

⁶ 鉄兜団は、ドイツ国家国民党 DNVP の行動組織として、1919年9月に結成され、国防軍の支持もあった。1930年には40～50万人を数えたが、ヒトラー内閣成立後、突撃隊と衝突し、敗北して吸収された（1933年11月）。これは、ナードラーが後に突撃隊と組む未来をより鮮明に表す。山口は、この「鉄兜団」を、「政治化した在郷軍人会型」の「前ファシズム」と呼んでいる。これは、ナードラーが幹部を務めた「在郷戦争参加者愛国クラブ」に当たると考えられる。ここでも、彼がのちにSS、すなわちナチスと手を組むことがほのめかされている。山口、同上、57頁参照。

⁷ S. 231.

⁸ S. 298.

ち着きがなくなり、別人のように目に光が宿った。

彼は絶えず、自分の隣人たちが、まるで落ち着いた平和な状態がずっと続くかのよう
に耕したり種をまいたりしている間、ひそかに戦争を待っていたのだ。彼は自分自
身が、みじめな生活の中で哀れな農民でいる人生以外の何物もないのだとは想像でき
なかった。今や男たちは旗の下に招集された。今こそ、真実が明らかになるのだ。⁹

彼は、ナチズムとヒトラーに共鳴する異様にゆがんだ暴力的な形で、自己の向上を目指
す人物なのである。軍隊式のタテ規律の中でしか生きられない、ある意味で不器用な人物
でもある。¹⁰

そんなナードラーは、戦争が始まって自分のことを思い出してもらえず、活用されな
いのを恥じ、がっかりしながらも、ようやく軍務につくことができた。だが、彼の最期は
あっけなかった。フランスで占領した小さな町で、名もないフランスの逃亡兵に、射殺さ
れてしまうのである。戦争で身を立て、名を上げることもならず、戦場を離れた町中で、
無防備な裸体をさらしてあっさり殺される。これが、強い主人と権力を欲して農民から軍
に身を投じ、下士官となり、やがてはナチスに魂を売った男の最期であった。

1.2 農業労働者とは何か ——農業労働者としてのシュトロローベルについて——

農業労働者とは、現代ではあまり聞きなれない言葉ではないだろうか。だが、かつては
農村で農作業に従事して賃金をもらう、農業労働者と呼ばれる一群の人々が存在した。農
業史研究者の足立芳宏は、「モナーヘン Monarchen」¹¹ と呼ばれる放浪者的労働者で、農村
における「土着」に対しての「他所者」としての人々に注目し、「反『移動労働者モナーヘン』
＝共産党」感情を日常的に蓄積していた農民層にあっては、「『反モナーヘン・奉公人＝ナ
チス〔傍点筆者〕』の言説は受け入れられやすかったのであろう」と述べている。¹² この作
品中のパウル・シュトロローベルは、モナーヒェンではなく、季節農業労働者または日雇い
農業労働者ともいえる、あいまいな存在ではあるが、ナードラーによって、少年期によそ

⁹ S. 517.

¹⁰ このナードラーの「兵隊根性」ともいえる描写は、単に性格の問題ではなく、社会的要因でも
あると考える。すなわち、当時のドイツの農村は、後述するように農業恐慌による貧窮に陥っ
ており、ナードラーはそんな貧しい農民生活よりも、いくらかはましな生活が送れるかもしれ
ず、立身出世の可能性のある軍隊生活を選んだのかもしれないのだ。

¹¹ モナーヒェンとは、「路上の君主たち Monarch」を自称する放浪者的労働者をさす。足立芳宏：近代
ドイツの農村社会と農業労働者 〈土着〉と〈他所者〉のあいだ（京都大学学術出版会）、1997、
47頁。

¹² 同上、248頁。

の土地から連れてこられた、日雇いでりんご取入れの手伝いをする労働者であるから、「土着」の人物ではなく、「他所者」である。その「他所者」の彼が、新しい思想である Kommunismus を村に持ち込み、「土着」の農民ナードラーと敵対することになったのであった。¹³

さて、若き日のマックス・ヴェーバーは、著書の中で、インストロイテやゲジンデ、デプタントなど、農業労働者をいくつかに分類して分析を加えている。

インストロイテ *Instleute* とは、東部農業労働者の基幹部分であり、農場の中の家族用住居に住み、通常半年間の解約告知付き契約により、一年契約で雇用され、後述のデプタント同様、賃金を貨幣、現物、土地割当、放牧権といった形で受け取る。インストロイテとの契約は、労働者「個人」ではなく、労働者「家族」との契約であることが、独特の形態である。自分自身はもちろん、妻、子供を要求に応じて労働に出す義務があった。¹⁴

ゲジンデ *Gesinde* は、奉公人のことである。未婚の男女は、年契約に基づいて雇われ、固定した年賃金と賄いを受ける。彼らは奉公人部屋に住んでいる。そして、領主の家庭の個人的な必要の他に、主として領主の畜舎における畜類飼育か畜耕労働を行う。恒常的に領主に使用され、その労働事情の特徴は、特定の種類の労働、男子は馬追い、羊飼い、家畜飼育係、見張り番など、女子はマイエリン（乳しぼりとミルク加工の監督）、賄い方、小間使い、乳しぼりなどとして使用されることにある。彼らの状況は、都市の奉公人と根本的に変わらない。¹⁵

本稿で問題としたいシュトロローベルは、日雇いで季節的な需要に応じて雇用されているため、ヴェーバーによるぴったりとした呼称はないに等しい。デプタント *Deputant*（あるいはデプタティスト）が、賄いを受ける代わりに固定した現物給を、穀物あるいは馬鈴薯という形で受け取るのであるが、¹⁶ この点が、給与を現物で受け取るシュトロローベルの立場と同じである。しかし、デプタントは通常結婚しており、若干の土地を有し、家畜を領主放牧地で放牧できるという点で彼と異なっている。

足立氏は、農村での主要な雇用労働者の一つの形態として、「自由日雇い」を挙げ、「非常に多様」であり、「近隣村落や地方小都市に在住していて収穫期にだけ雇用されるもの」もいたと指摘している。¹⁷ これが、シュトロローベルの立場に最も近いであろう。本稿では、シュトロローベルは「季節需要に合わせて雇用された日雇い農業労働者」に準じるとしてお

¹³ 村にとっての「他所者」がコミュニストであるという展開は、ゼーガースの他の作品にもみられる現象である。ゼーガースの „Der Kopflohn“ の主人公で、「お尋ね者」として一貧村に逃げてきた主人公ヨーハンは、「心情的左翼」であるし、共産党員イープストは、工場の閉鎖によってヨーハンの目指すボッツェンバッハ村に移住してきた人物である。

¹⁴ マックス・ヴェーバー（肥前栄一訳）：東エルベ・ドイツにおける農業労働者の状態（未来社）、2003、23頁。

¹⁵ 同上、20～21頁。

¹⁶ 同上、22頁。

¹⁷ 足立、前掲書、222頁。

く。

ヴェーバーの分析で興味深いのは、ベルリンの影響下にあるブランデンブルク州では、農業労働者の子供たちは、他の営業部門に移行し、とりわけベルリンに赴くという点である。¹⁸ シュトロローベルも、「俺は復活祭には学校を卒業して、ベルリンに行きたいんだ。そこで溶接工の見習いになるんだよ」¹⁹ とクリスチアンに言っている。この現象の理由として、東部のユンカーのもとでの、農業労働者の悲惨な状況、ヴェーバーの言う「最も惨めな工業労働者の状態よりひどい」²⁰ ことが挙げられる。このため、農業労働者は都市へ逃亡するのである。²¹ 「彼〔シュトロローベル〕は徹底的にこき使われたので、疲れ果てたあまりに、時には食欲を失った」²² と描写される。シュトロローベルはユンカーに雇われているわけではないが、ナードラーは „Knechtlein“（「若い下男」）²³ を雇った気分であり、彼はさんざん仕事をさせられた。この点が、ヴェーバーの分析と似通った点であり、おそらく彼がコミュニズムに関心を抱いたのも、労働における雇用者と被雇用者の不平等、そして過酷な労働条件にあったのではないかと読者に推測させる。実際、彼はナードラーの元で働いているとき、少年ながら既に八時間労働について語っており、労働者の権利について一定の見解を持っている描写がある。農業労働者に団結権、団体交渉権といった労働基本権の一部が認められたのは、1918年12月のことであり、²⁴ 作中の時間軸上で、シュトロローベルはかなり新しい意識をもつ人物として造形されていると考えられる。

足立によれば、ドイツの農業労働者は、第二帝政期には317万人、ヴァイマル期には約260万人もいた。²⁵ しかし、この時期の彼らはユンカー経営における農業労働力の存在形態として言及される以外には、従来の歴史認識にはほとんど登場しなかった。²⁶ つまり、「忘れ去られた階級」であった。農業労働者は、数の上では、マジョリティであったが、「帝国ドイツの最底辺」、社会的周辺者であったのだ。²⁷ 彼らは文学史上も「忘れ去られた階級」と言えるのであり、ゆえに従来の研究ではシュトロローベルは問題にすらされなかった。そんな彼らに光を当ててるのも、本稿において農業労働者を取り上げる一つの理由である。

¹⁸ ヴェーバー、前掲書、133頁。

¹⁹ S. 111.

²⁰ ヴェーバー、前掲書、155頁。

²¹ 同上。なお、彼によるとこれは当時の一般的見解であり、必ずしも当てはまらない土地も挙げているが、このナードラー兄弟が住む村があると思われるブランデンブルク州は範疇に入っていないため、この見解が当てはまると判断した。

²² S. 110.

²³ S. 111.

²⁴ 豊永泰子：ドイツ農村におけるナチズムへの道（ミネルヴァ書房）1994、169頁参照。

²⁵ 足立、前掲書、3頁。

²⁶ 同上。

²⁷ 同上。足立の研究は、『見捨て去られた細民たちの復権』という社会的問題意識に支えられているのであり、その点で本稿と問題意識を共有している面がある。

以上が、本稿における予備知識としての農業労働者とシュトローベルについての簡単な考察である。

1.3 KPD の農村活動家としてのパウル・シュトローベル

作中において、ナードラーが住む農村で活動を展開する коммуニストのパウル・シュトローベルについての描写は、あまり多くはない。それでも、彼の描写を通して初めて、ナードラーや突撃隊と、農村におけるナチスへの抵抗者としての農業労働者²⁸ という対立構造がはっきりと際立つのである。この節では、彼の姿を通して、主人公ハンスやその養父ゲシュケ、母マリーといった都市の労働者たちに通じる、農村で活動を展開しながらナチスに抗する農業労働者の様子やその一貫した精神を追っていこう。

シュトローベルが初めて登場するのは、ナードラーが周遊旅行から上機嫌で戻ってきたときである。

ヴィルヘルム・ナードラーは、ある晩、よそ者の、まだ幼さの残る少年を連れて、楽しげに周遊旅行から帰宅した。彼は、りんごの収穫が迫っているので、この少年を旅行の途中で苦勞して探し出して、日雇いとして連れてきたのだと紹介した。²⁹

この少年こそが、パウル・シュトローベルであった。彼は、取入れのために学校を一週間も休んだ。母親が彼をナードラーに託したのは、通貨マルクが動揺していた当時、賃金がパンや卵など現物でもらえるなら家計が助かり、手伝いをする間、少年はナードラーにまかなってもらえるため、そうするより他になかったのだ。

彼は第2節で言及したように、下男を雇った気分のナードラーにこき使われた。そんな彼が心を許したのは、ナードラーの弟で、靴屋のクリスチアンだけであった。クリスチアンは、第一次世界大戦に従軍し、足が不自由になって帰郷して、今は靴修理で食べている人物である。彼は、兄のヴィルヘルムに対して批判的であり、最後までナチスにも、そして коммуニズムにも与しない。このクリスチアンとシュトローベルは、必ずと言っていいほど共に登場する。クリスチアンはシュトローベルに同情的である。後述するように、シュトローベルの最期に関しては、クリスチアンの内的独白によって語られるのである。

²⁸ 山口は、未組織労働者がナチスを支持したことを挙げ、農業労働者も含むと指摘している。ただ、この指摘はH・A・ヴィンクラーの1977年の研究に依拠している。本稿では、最新の研究で、しかも作品中の舞台ブランデンブルクを取り上げた熊野直樹の見解に沿って論じる。山口、前掲書、114頁参照。また、熊野直樹：統一戦線行動・「共産主義の危険」・ユンカー——ヴァイマル末期におけるドイツ共産党の農村進出と農村同盟——〔九州大学法政学会『法政研究』第70巻、第2号、2003〕参照。

²⁹ S. 110.

ナードラーの元を去ってからしばらく彼は登場しないが、1932年3月13日に行われた、ヴァイマル憲法下での第2回目の大統領選挙の際、ナードラー家の納屋の戸口に、共産党のポスターが貼り付けられていた。ポスターには、„Wer Hindenburg wählt, wählt Hitler“ 「ヒンデブルクを選ぶ者、それはヒトラーを選ぶ者だ」³⁰と書いてあった。この時は明示されないが、これがシュトロローベルの仕業であることは、のちに判明する。

シュトロローベルは、クリスチアンと再会した時に、ナチスが打ち出した農村重視の政策の一環である農業綱領（1930年3月）³¹を話題に出し、農民ヘーニッシュが強制競売になるのを食い止めて競売は延期になったことを話す。³²つまり、農村を重視しているはずのナチスが持ち出す綱領を守らせるために、ヘーニッシュを助けたことを明かすのである。

俺たちは、奴らナチスが持ち出して偉そうにいばっていやがる綱領を、否が応でも守らせてやるんだ。農民とドイツの社会主義のためにな。ヘーニッシュはドイツの農民じゃないか、そうだよ。³³

このシュトロローベルの決意は、ユートピアを目指す Kommunismus に対する強い信頼であり、主人公ハンスにも見られ、ナチスへの抵抗、告発というこの作品のテーマと並ぶ主題である。

シュトロローベルは、ナードラーの元で働いた後は、家具職人になっていたが、選挙になると、村へビラをまきにやってきた。それをいまいましく思うナードラーは、今につかまえると決心する。そして、そのナードラーの願いが現実になる日がやってきた。シュトロローベルは、ついにナードラーと彼が率いる突撃隊の若者たちに捕えられて、足に針金を巻き付けられ、石を重しにして川に沈められ、殺されてしまったのである。彼の遺体を探し出してやろうとした道路工夫もいたが、彼は強制収容所へ送られてしまった。ここに、一見、ナードラーらナチスが、Kommunismus や反ナチズムへの暴力的な勝利を収めるという構図が描き出されるのである。

³⁰ S. 300. これは KPD が掲げたスローガンである。ゼーガース（北他訳）、前掲書、上巻、331 頁訳注参照。

³¹ 石田勇治：ヒトラーとナチ・ドイツ（講談社現代新書）、2015 年、106 頁。ナチ党の正式名称「国民社会主義ドイツ労働者党」という党名を逆にとり、皮肉とした発言ともとれる。

³² 強制競売を阻止し、農民たちが農場から追い出されることを食い止めるために、農村住民が自発的に結集した自助的社会的共同体である「緊急共同体」が、1931 年以降、全国で組織されており、当時のブランデンブルクにおいても創設されていた。このシュトロローベルの行動は、「緊急共同体」の活動に準じるもので、ゼーガースが描く農村活動家としての彼の行動が、史実と呼応する好例である。なお、「緊急共同体」については、熊野、前掲、『法政研究』11 頁参照。

³³ S. 304.

2 『死者はいつまでも若い』におけるナチズムとコミニズム、反ナチズムの相克——「共産主義の危険」をめぐる——

2.1 当時のドイツ農村における共産主義的アジテーションの実態

この節と次節では、本稿における結論を導くために必要な史実を概観する。その際使用する文献は、ドイツ政治史研究者である熊野直樹の、ブランデンブルクを中心に KPD が農村で展開したアジテーションの実態、ユンカーとナチス、ユンカーの利益代表たるドイツ国家国民党 DNVP の「共産主義の危険」という危機意識への指摘がなされた論文である。

KPD のベルリン・ブランデンブルク地区は、少なくとも 1928 年 3 月の段階から、農村においてプロパガンダを行っていた。³⁴ この頃の KPD の農村でのアジテーションは、コミンテルンの見解を農村で普及させることであった。³⁵ 1932 年 5 月以前でも、ブランデンブルクでは共産主義者らの活動が確認でき、かなりの程度プロパガンダの都市から農村への重点移行も確認できるという。³⁶

1932 年 5 月共産党中央委員会総会において、共産党は「反ファシズム行動」を提起し、その路線を「社会ファシズム論」から「反ファシズム統一戦線」へと転換させた。³⁷ 「反ファシズム」の観点から、農村と都市との統一戦線並びに都市プロレタリアートと農村プロレタリアート、及び零細・小農民との統一戦線が提起されたことで、共産党の農村における統一戦線行動は活発化した。³⁸ この提起を受けて、ベルリン・ブランデンブルク地区の共産党は、「反ナチス・反テロ」「反ユンカー」「ソ連に対する戦争反対」というスローガンを掲げ、工業労働者や失業者の支持で、都市と農村との反ファシズム統一戦線を成立させるという方針を立てた。³⁹

1932 年 8 月においても、「反ファシズム行動（アンティファ）」を軸とする反ファシズムのエージェンシー〔組織的行動—筆者〕行為が相変わらず展開されていた。⁴⁰ アンティファとの連携を見せていた政党としては、左派社会民主主義者、右派共産主義者であり、最大の政治勢力が KPD であった。⁴¹ 当時の反ファシズム・エージェンシー行為は、「共産主義の危険」⁴² を実感させるようであった。経営でも、農村でも、最後のナチスに対するエ

³⁴ 熊野、前掲論文、『法政研究』、5 頁。

³⁵ 同上。

³⁶ 同上、7 頁。ただし熊野は、彼らの農村への影響力は弱かったと指摘する。

³⁷ 熊野、前掲論文、『法政研究』、4 頁。

³⁸ 同上。

³⁹ 同上、8 頁。

⁴⁰ 星乃治彦：反ファシズム・エージェンシーの可能性——ナチス政権成立直前における「共産主義の危険」『熊本県立大学文学部紀要』熊本県立大学文学部、第 8 巻、第 2 号、2002、74 頁。

⁴¹ 同上。

⁴² 後述するように、「共産主義の危険」は、当時の言葉で „Die kommunistische Gefahr“ と呼ばれ、

ージェンシー行為が果敢に展開されていた。⁴³ KPD の反ファシズム・エージェンシー行為に、ナチスは「共産主義の危険」を見たのである。⁴⁴

当初、ベルリン・ブランデンブルク地区の共産党は、農村における「反ファシズム」の主要な動員対象を、社会民主党系やキリスト教系の農業労働者に置いていた。内務省は、共産党の農村での行動は強化され、組織的に取り組まれていると報告し、重心は農業・森林労働者の動員にあるとみなしていた。⁴⁵

1932 年 10 月、農業労働者だけでなく、零細・小農民も動員するために、共産党は組織的に勢力を農村に投入するように指令を出した。1932 年頃には、ブランデンブルクは「農業労働者・突撃地域」として特定された。⁴⁶ そして、共産党は、農村において「農民委員会」を中心に、農業労働者と小・零細農民の動員による「勤労村落住民の統一戦線」の設立を目指して活動することになる。⁴⁷

内務省の資料においては、共産党が農村で勢力を伸ばしたことについて、共産党が農村での宣伝活動を集中的にやったこと、農村住民の困窮状態を理由として挙げているという。⁴⁸ これらの、特に参照したブランデンブルク地区共産党の農村でのアジテーションの実態が、次節で述べるように、ヒトラーとユンカーが共有した「共産主義の危険」という危機感に結びついたのであり、ゼーガースが描いたベルリン近郊の一農村においても、その史実は当てはまると考えられるのである。

2.2 「共産主義の危険」とシュトロローベル殺害

1933 年 1 月 30 日、アドルフ・ヒトラーの首相任命により、ナチスがついに政権を獲得した。しかし、ナチスは最後まで自由選挙では過半数を獲得できず、この内閣も、ドイツ国家国民党 DNVP 党首アルフレート・フーゲンベルクが、食糧農業相兼経済相として入閣することで、DNVP との右翼連立内閣として出発したのであった。

DNVP はユンカーの利益代表であるとされる。なぜユンカーがヒトラー内閣成立において積極的な役割を演じたのかが争点の一つとなるところであり、熊野は農村における共産党の組織的なアジテーションに対する、全国農村同盟 RLB に結集したユンカーたちの、「共産主義の危険」という深刻な危機感の存在を指摘している。これは、DNVP やナチス

ナチスとユンカーが共有する危機感であった。熊野、前掲論文、『法政研究』、参照。

⁴³ 星乃、前掲論文、73 頁。

⁴⁴ 熊野、前掲論文、3 頁。これは星乃論文についての熊野の指摘である。

⁴⁵ 同上、10 頁。

⁴⁶ 同上。

⁴⁷ 同上。

⁴⁸ 星乃、前掲論文、84～85 頁。

にまで共有されていた危機感であった。⁴⁹

ここで、当時の農村の貧窮状態を挙げておかねばならない。1932年12月から33年1月にかけて、景気回復といった雰囲気は支配的なドイツであったが、農業界はこうした雰囲気とは無縁で、深刻な農業恐慌による貧窮にあえいでいた。⁵⁰ RLB 指導部は、農業恐慌の激化による農民のさらなる急進化という危機感を抱き、当時のシュライヒャー政府に対して農業保護要請を頻繁に行っていた。⁵¹ 彼らの危機感は、1930年から31年にかけてのそれとはかなり異なり、右翼急進化すればナチス化、左翼急進化すればボリシェヴィズム化するという内容であった。⁵² このどっちつかずの危機感は、作中では、ナチスを、„eine[r] neuen Partei mit vertracktem Namen, bei der man sich nicht auskannte“ 「不快な名前でも正体不明の新しい政党」⁵³ とチーゼン男爵に言わしめる。結果的に、RLB は保護貿易主義を取らないシュライヒャー内閣では、共産主義による農業界の差し迫った危機を解決できないと判断し、ヒトラー内閣への交替を目指して暗躍し始めるのであった。⁵⁴ RLB は、「ドイツ革命によって生じた農民レーテや農民騒擾」という記憶を忘れることができず、⁵⁵ そしてその下部組織であるブランデンブルク農村同盟の幹部たちは、「1928年の暴力を伴ったラントフォルク運動⁵⁶のような急進的な運動が、KPD 主導で再び引き起こされるのではないか」

⁴⁹ 熊野、前掲論文、2頁。

⁵⁰ この時期、つまり世界大恐慌の時期に、世界同時的な農業恐慌が起きたが、ドイツでは既に1927年から1928年にかけて、とりわけ畜産部門が打撃を受ける農業恐慌が生じていた。ドイツは、第一次大戦後のヴェルサイユ体制で定められた賠償・対外債務支払いのために、輸出振興政策をとっていたが、関税率の引き上げが自由にできなかったために、外国に対して国内市場を開いた状態となり、関税率の低さゆえにドイツ国産の農産物価格は安価な外国産農産物よりも割高となった。このため、外国産農産物に価格競争で敗れた国産農産物の価格は下落し、農業恐慌はいつそう深刻化した。そしてこのことが、後述のラントフォルク運動へとつながっていく。熊野直樹「バター・マーガリン・満洲大豆—世界大恐慌期におけるドイツ通商政策の史的展開」熊野直樹他『政治史への問い 政治史からの問い』法律文化社、2009年、150～151頁参照。熊野直樹：ナチス一党支配体制成立史序説（法律文化社）1996、117頁参照。

⁵¹ 同上。

⁵² 同上、117頁～118頁。

⁵³ S. 173. この「不快な」という単語が、ナチス〔国民社会主義ドイツ労働者党〕の党名に掲げられた「社会主義」という言葉を指すことは容易に想像できる。そして、この社会主義、共産主義への不快感が、後にユンカーが抱く「共産主義の危険」につながっていく。邦訳（アンナ・ゼーガース、（北通文他訳）：死者はいつまでも若い（白水社）1953、上巻195頁）では、「妙な名前の正体もよくわからない新政党」と訳されているが、この訳ではユンカーの危機感が伝わらないため、あえて直訳しておく。また、ゲオルギー・ミハイロヴィッチ・ディミトロフは、「これは〔ドイツ型のファシズムは〕、あつかましくも民族社会主義〔原文ママ〕と自称しているが、社会主義とはなんの共通点ももっていない」と報告で述べている。Г・ディミトロフ（坂井信義・村田陽一訳）：反ファシズム統一戦線（大月書店）1967、14頁。

⁵⁴ 熊野、前掲論文、『法政研究』15頁。

⁵⁵ 熊野、『ナチス一党支配体制成立史序説』、126頁。

⁵⁶ ラントフォルク運動は、農業恐慌の最中、1928年1月、北ドイツのシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン地方で起こった、農民の自立的な運動である。約14万人が参加し、「食糧の外国からの

と恐れていたのであった。⁵⁷

1932年11国会選挙で、ナチスは農村部の票を大幅に減らし、KPDは大躍進したことで、「危機感」が、DNVPとナチスの指導部に共有された。⁵⁸

1933年1月には、農業恐慌が激化し、経済危機はブランデンブルクでも激しくなり、農村の絶望的な雰囲気がかの地でも急進主義を増した。⁵⁹そして、前述した、作品中でも登場する強制競売に反対する「緊急共同体」と、強制競売阻止のための農村内における統一戦線行動が結びつくことに対する危機感が、RLBとDNVPにもたらされ、こうした危機感が、ユンカーやDNVPを、シュライヒャー内閣打倒、「共産主義の危険」を回避するためのヒトラー内閣成立に向けて行動させる主要な原動力になったのであった。⁶⁰そしてKPDは、1933年2月日の国会議事堂炎上により、大衆政党としてもドイツ政治の要素としては排除されてしまった。ナチス政府は、KPD党員の逮捕、迫害、殺害さえにも至るのであった。⁶¹

作中では、ユンカーと見られるのはチーゼン男爵であり、彼が長を務める国粋主義団体の幹部が、ナードラーである。そして、ナードラーは突撃隊と共に、共産党の活動家シュトロローベルを虐殺と言っているやり方で殺害する。ここに、彼らの抱く「共産主義の危険」が垣間見えるのである。

当時の農村は窮乏状態で、ヴァイマル共和国末期に政権を握っていた社会民主党は農業論や農民政策の点で立ち遅れ、ナチスの農村進出を許す重要な要因となった。⁶²そのナチスは、「社会主義」の名を掲げていたものの、実際にはロシア革命とドイツ革命の対抗革命として生じ、いわゆる「左翼」とは全く異なる「極右」であった。コミニズムは、さまざまな束縛や抑圧による非人間的な状態から人間の解放を目指すヒューマニズムに基づく「他者のための思想」であり、ナチズムとはベクトルが全く異なっている。だからこそ、これまで排外され抑圧されてきた弱い立場に立たされてきた若いシュトロローベルは、コミ

自立」が唱えられ、国内の農産物の適切な確保によって、ドイツ農業がドイツの農地でドイツの国民を養えるように要求がなされた。これはドイツ通商政策の即刻根本的改変の要求であった。運動は直接的・急進的行動へと発展し、強制競売実力阻止、納税拒否、税務署など自治体当局への爆発物投下という事件まで起こった。ユンカーたちは、このような事態がKPD主導で引き起こされることを恐れたのであろう。ラントフォルク運動については、熊野、前掲論文、『政治史への問い 政治史からの問い』、151頁参照。

⁵⁷ 熊野、前掲論文、『法政研究』7頁。

⁵⁸ 同上、13頁。

⁵⁹ 同上。

⁶⁰ 同上、16頁。

⁶¹ O. K. フレヒトハイム（足利末男訳）：ヴァイマル共和国時代のドイツ共産党（東邦出版）1971、269頁参照。

⁶² 原田溥：ドイツ社会民主党と農業問題（九州大学出版会）1987、23頁。

ユニズムを支持して活動したのである。⁶³

両者が狭い村で対峙すれば、いずれは激突し、政治思想の違う場合に生じがちな、血が流れる事態に陥ることは明白であった。ユンカー・チーゼン男爵を後ろ盾にしたナードラーによるシュトロベルの殺害は、相対する二つの思想の軋轢と、権力者側の危機意識が生んだ悲劇だったのである。

2.3 ナチズムと Kommunismus、反ナチズムの相克——クリスチアンの視点を通して——

シュトロベルが殺害されたことは、前述したようにナードラーの弟クリスチアンの内的独白で語られていく。クリスチアンは、ナチスはもちろん、Kommunismusにも加担しないのであるが、それでもシュトロベルに対しては同情的な人物であった。

彼は「シュトロベルの足に針金を巻き付けて、石を重しにすることで、得をするくず野郎はだれだ？」⁶⁴ と自問する。クリスチアンの視点を通じて、語り手の意識ではナチスが「畜生ども」「虫けらのようなくず野郎」として軽蔑の対象となっていることがうかがえる。

そして、シュトロベルに同情的な人物はもう一人いた。道路工夫ヴォルパートである。彼は、シュトロベルの遺体を川から引き揚げてやろうとするが、それが見つかって、強制収容所に送られてしまう。しかし、彼はクリスチアンのことはおくびにも出さず、クリスチアンは強制収容所に連行されずにすんだ。そんな彼は、ヴォルパートを「まとも」⁶⁵ だと思う。

しかし、彼は軒下の自分の三脚の上で、誇らしく思っていた。それは、細くて切れやすくはあるが、まともさの糸でああいう人間〔ヴォルパート〕と結びついていたからであった。⁶⁶

ここでは、先ほどのナチスについての語り手の意識が、まともクリスチアンの内的独白を通じて、今度はシュトロベルとヴォルパートという二人の労働者の「まともさ」を訴

⁶³ Kommunismusを奉じて建国された諸国での実態は理想と現実が乖離していたが、この作品が出版された1949年にはまだ、Kommunismusは多くの人々の希望であったろうと思われる。

⁶⁴ S. 379.

⁶⁵ 道家忠道によると、ゼーガースは好んで「まともな」*anständig* という言葉を使うという。道家は、彼女が「知識や教養にかかわらず、本能的に正しいものをつかみ、正しい行動を取る人について言っているようだ」と指摘する。ここでヴォルパートについて「まともな」と言われていることは、彼が、ひいてはナチスに抗って殺害されたシュトロベルについても是とする、「限りなく作者に近い立場」の語り手の姿勢が表れているといえよう。道家忠道「アンナ・ゼーガース—人と芸術」〔道家忠道他：アンナ・ゼーガースの文学世界（三修社）、1982〕25頁。

⁶⁶ S. 411.

え、同情と賛歌を送っている。ナチスという暴力を伴った権力の前では、反対する人々は、ロープではなく、「細くて切れやすい糸」でつながるしかない。しかし、それは横に張り巡らされれば、蜘蛛の巣のように、いつかは容易には切りがたい強度を持つようになる。

彼らは、社会的には底辺に位置するともいえる労働者であり、社会的弱者である。その二人が、村において自分たちよりも「上」にいる権力者たちに最後まで抗い、一人は命を落とし、もう一人は強制収容所に入れられることも辞さなかった「強さ」を持つことを、ゼーガースは「糸」という表現と、クリスチアンの心情を通して見事に描いているのである。

確かに、シュトロローベルはナードラーと突撃隊に殺害され、ここに、農村での Kommunismus の主張やナチスへの抵抗は失敗に終わり、ナードラーとナチスは凱歌を上げたかのように見えた。だが、ナチスの暴力の前に力尽きたように見えるシュトロローベルも、命は失ったが、その一貫した主義主張は生き続け、その前にやがてナチスが倒れることになった。ここに、本作品中でのナチズムと Kommunismus、反ナチズムの相克というモチーフは、Kommunismus、反ナチズム側に軍配が上がる。つまり、作中の事件当時は勝利したと思われたナチズムだが、作中終章では、Kommunismus や反ナチズムの勝利に終わるのである。

むすびにかえて

以上、作品中の農村における主要人物、農民ヴィルヘルム・ナードラーと農業労働者パウル・シュトロローベルの描写を考察し、また、当時の農村の危機的状況、権力者たちの「共産主義の危険」という危機感を、政治史・農村社会史という史実を通して見た上で、本稿におけるシュトロローベル殺害という事件から炙り出されるナチズムと Kommunismus、反ナチズムの相克を分析した。

ここでは結びとして、本作品の謎めいたタイトル「死者はいつまでも若い」という言葉を取り上げた上で、ひとつの解釈を試みる。

長橋芙美子は、「死者はいつまでも若い」という題名を、「象徴的標題」とした上で、「多くの犠牲を出しながらも、その苦痛の中で見失われることのない未来への展望と、労働者階級の強靱さ」を読み取る。⁶⁷ そして、この作品が、清掃人だった父エルヴィンの死で始まり、彼の妻子である主人公の仕上工ハンスの死で終わる構成にも注目している。確かにこの読み方は素直な取り方であり、ある程度賛意を示したい。

この作品は鏡像のような構造であり、冒頭ではマリーのお腹に主人公ハンスが、最終章ではハンスの子供が恋人エミーのお腹に宿っていることが描かれている。つまり「子供」によって、希望すなわち労働者と Kommunismus の「明るい未来」が暗示されるのである。

⁶⁷ 長橋芙美子：『死者はいつまでも若い』——現代史の総括として〔道家他、前掲書〕159頁。

子供が希望の象徴であるというこの描写で想起されるのが、映画「白バラは散らず」で有名なゾフィー・ショルが、処刑前夜に見た夢である。彼女は、「長い白い着物をつけた子供」を一人抱いて、険しい道を歩いて洗礼を受けに行くのだが、氷河の裂け目があり、とっさにその子供を安全に向こう側へ渡したが、自分は落下する、という夢を見たのであった。「白い着物の子供は『われわれの理想』であり、どのような妨害にもかかわらず遂行される。『われわれ』はその露払いだが、実現直前にその理想のために死ぬことになる」というのである。⁶⁸ これは、ゼーガース作品中の人物がたどる道と奇妙にも符合し、現実のナチス・ドイツという過酷な世を闘った女性が見た夢と、女流作家の反ナチズム文学という「虚構の世界」の不可思議な交錯でもある。

また、Hilzinger は、カール・リープクネヒト Kahl Liebknecht やローザ・ルクセンブルク Rosa Luxemburg らの名前を挙げて „junggebliebenen Toten“（「若いままの死者」）としている。⁶⁹

しかし、本稿ではあえてシュトローベルに目を向ける。この作品の原題は „Die Toten bleiben jung“ である。主人公ハンスも若くして銃殺されるが、ナードラーに虐殺されたシュトローベルもまた若い。そして、彼もまた労働者、特に農村における農業労働者であった。ヴェーバーの言及⁷⁰ を思い出してみよう。東部のユンカーのもとでの農業労働者の悲惨な状況は、ヴェーバーの言う「最も惨めな工業労働者の状態よりひどい」状態にあったのであり、それゆえに農業労働者は都市へと逃亡するのであった。そうだとすれば、シュトローベルの置かれていた状況は、都市の労働者ハンスよりも悲惨であったのではないだろうか。そんな中で、命を賭してまで KPD の活動家としてビラをまき、強制競売から農民を救ったシュトローベルの思想は、彼の若さと共にずっと生き続け、ナチス政権崩壊後は、DDR として一国を成したのであった。DDR 建国という当時において輝かしい事件は、ゾフィー、ハンス、シュトローベルといった若い幾千万の命や人生の上に成り立っており、われわれは彼らとともにあり続けるという意味を、作者は題名に込めたのではないだろうか。

しかし、DDR は硬直化したスターリニズムを取り入れ、ドイツ社会主義統一党 SED の一党独裁体制を敷いた。この国家は、イデオロギーこそ異なるものの、かつてゼーガースが厳しく批判したナチズムと似た独裁という側面を持つ「全体主義」国家であるという見方もできた。

ゼーガースは DDR では体制に組み込まれて、表立って政権を批判する作品を出すこと

⁶⁸ 宮田光雄：ナチ・ドイツと言語——ヒトラー演説から民衆の悪夢まで（岩波新書）2002、196 頁

⁶⁹ Sonja Hilzinger: *Anna Seghers*. Reclam (Stuttgart) 2000. S. 185/186. この兩名の名は作中にも登場し、社会民主党員ゲシュケは、共産党員のトリローベルに反発しながらも、ルクセンブルクの葬儀に参列する。

⁷⁰ ヴェーバーの報告は、19 世紀後半のものという制限はあるが、足立の著書から読み取れる限り、事態は当時もそう変わらなかったと考えられる。

はなかった。「御用作家」と呼ばれてもある意味仕方がなく、ゼーガースの現代における評価を難しくしている点はどこにある。

また、戦後ゼーガースは DDR に居を構えたが、それは政治的決断だけでなく、西ドイツでは коммуニストの入国は拒絶されており、西側での出版可能性も断たれたという要素も関係しており、他に選択肢がなかったためでもあった。⁷¹

スターリニズムを奉ずる諸国においては、ユダヤ人で以前西側に亡命した過去を持つ同志達は、「党の路線からの逸脱者 *Abweichler*」として迫害され、粛清された。⁷² ゼーガースは前述の通り、メキシコとフランスに居住し、しかもユダヤ人であったから、この弾圧におびえ、「沈黙」せざるを得なかったことであろう。戦間期はナチズムと коммуニズムの対峙、戦後は東西冷戦と、ゼーガースはつねに政治的に翻弄された作家でもあった。

公刊されている手紙などの一次史料を見る限りでは、ゼーガースはヒトラーに反対しても、スターリンについては「沈黙」をもって「受容」することを決めているようである。

ゼーガースの沈黙について、ハイナー・ミュラーは「よく考えてから」あるインタビューでこう答えた。

[ゼーガースの沈黙の原因は] 第一に、彼女は不安だったからです。そしてこのことが過小評価されていると考えます。(……) 私は彼女が何を知っていて何を黙っていたのかも知らないのです。そして第二に、彼女はヒトラーかスターリンかという選択肢とともに成長したからです。これはブレヒトも同じでした。つまり——ヒトラーに反対するという事は、スターリンについては沈黙するという事を意味したのです。彼女はこの枠構造から外に出なかった、それが問題でした。⁷³

ヒトラー政権が瓦解し、社会主義を奉ずるソ連が大国の仲間入りを果たし、DDR という衛星国家を作った戦後、ともに成長した選択肢の一つ（ヒトラー）を失い一つを得た（スターリン）今、彼女に残された道は一つだった。つまり、スターリン、ひいては DDR の政権与党である、社会主義統一党 SED の「受容」と「沈黙」である。

そんなゼーガースに、西ドイツの作家ギュンター・グラスは、「ベルリン、1961年8月14日 東ドイツ作家同盟議長宛て」とする公開書簡を発表した。⁷⁴ その中で彼は、ゼーガースは「私の世代あるいは、聞く耳を持つすべての人⁷⁵ に、忘れることのできぬあの戦争

⁷¹ Hilzinger, S. 64.

⁷² Ebd., S. 68.

⁷³ Ebd., S. 71. Hilzinger による Marie Haller-Neuermann の文章から再引用。

⁷⁴ これは、最初「そして作家は何をなするか？」の標題で、『デイ・ツァイト』紙の8月18日号に掲載された。ギュンター・グラス（高本研一訳）：ドイツ統一問題について（中央公論社）1990年、180～183頁参照。

⁷⁵ この「聞く耳を持つすべての人」という言葉は、文字通り「聞く意思がある人」だけを指すの

を基準にして、正義と不正の区別を教えてください」存在であると敬意を表すが、彼女の代表作『第七の十字架』の登場人物を挙げて、「ただ、強制収容所の司令官の名前は、今日もはやファーレンベルクではなく、その名はヴァルター・ウルブリヒトで、あなたの国の元首です」⁷⁶ と言い、「あなたが、今日まで多くの人々にとって、徹底した暴力拒否の権化であるあなたが、[.....] 一人の独裁者の暴挙を是認するのは、許されることではありません」⁷⁷ と痛烈に批判した。そして、当時ゲルハルト・シュレーダー内相によって提案されていた「非常事態法」に向かって、かつてのように（「有刺鉄線に向かって」）語りかけてほしい、自分も西側で語るつもりであると呼びかけたのだった。⁷⁸ これは、グラスという西ドイツの作家が、ゼーガースが反ナチズム文学の旗手でありながら、東ドイツで体制側に甘んじていることを批判し、西ドイツで着々と進む有事体制に、自分たちと共に連帯して闘ってほしいという希望を述べたものとして、注目に値する発言であった。

より若い世代の作家、クリスタ・ヴォルフも、東ドイツ崩壊の時期、1989年11月8日に、社会主義刷新運動の中で、12名の作家・芸術家たちと、「皆さん、この国にとどまってください。そして民主主義的な社会主義を作っていきましょう」と述べていた。⁷⁹ ゼーガースより若かった彼女も、社会主義を捨てることはできなかったのである。

たしかにソ連型社会主義は失敗に終わり、社会主義リアリズムや DDR 文学も日本では忘れられようとしている。だが、一国の運命とともに、その体制下に花開いた芸術文学まで忘れ去ってよいものであろうか。「DDR の失敗をもって、ドイツ農民戦争以来のドイツ人民の解放闘争の意義を全否定し去ることはできない」。⁸⁰ まさに「死者はいつまでも若い」のであり、そこに歴史と文学の不思議な交錯を見てもよいであろう。

であろうか。「神の国の秘密を語るための譬の活用」を説くキリストの「耳の聞こえる者は聞け」（„Wer Ohren hat zu hören, der höre!“）を思い起こすことのできる表現である。塚本虎二訳：新約聖書 福音書（岩波文庫）1963年、18頁（マルコ・4・23）参照。Vgl. *Das Neue Testament*. Freiburg, (Verlag Herder), 2007, S. 76.

⁷⁶ グラス（高本訳）、前掲書、181頁。

⁷⁷ 同上、182頁。

⁷⁸ 同上、183頁。

⁷⁹ 鷺山、230頁。

⁸⁰ 高村弘：ドイツ反戦・反ファシズム小説研究（創樹社）1997、572頁。

Die Konfrontation von Nazismus und Kommunismus in

Die Toten bleiben jung von Anna Seghers

Aya NAKAHARA

In diesem Aufsatz, der meine Studien zu Anna Seghers fortsetzt, gehe ich auf die Figuren des Bauern Wilhelm Nadler und des Landarbeiters Paul Strobel in *Die Toten bleiben jung* ein. Das Thema Bauern und Landarbeiter in der Literatur wird von der Forschung sehr vernachlässigt. In der Seghers-Forschung, so etwa von Sonja Hilzinger, wird eher Nadler hervorgehoben, weniger jedoch Strobel. Beide können aber als gleichwertig betrachtet werden, da sich in ihnen der Gegensatz von Nazismus und Kommunismus verkörpert.

Wilhelm Nadler ist ein typischer Vertreter der deutschen Bauern unter den Verhältnissen der späten Weimarer Republik und der Nazizeit. Er lebt in einem Dorf in der Nähe Berlins und hasst das gewöhnliche Bauernleben. Er wird Unteroffizier, weil er sich nach Autorität sehnt und den Krieg verherrlicht.

Nach dem Kapp-Putsch lebt er weiterhin unzufrieden in seinem Dorf, steigt aber als Kader in der örtlichen NSDAP-Organisation auf. Als der Zweite Weltkrieg ausbricht, ist er begeistert und seine Augen glänzen, als ob er ein anderer Mann würde. Er möchte sich im Außergewöhnlichen und Gefährlichen des Krieges entfalten. Allerdings stirbt er einen überraschenden Tod. Er wird in Frankreich von einem namenlosen französischen Deserteur erschossen. Er gewinnt keine Ehre im Krieg und macht keine Karriere als Soldat. Er stirbt sogar nicht einmal auf dem Schlachtfeld.

Paul Strobel ist ein Landarbeiter und Tagelöhner, der als Junge von Nadler mitgebracht wurde. Er ist kein Einheimischer, sondern ein Fremder. Als solcher bringt er auch die neuen Ideen des Kommunismus mit ins Dorf und verfeindet sich mit dem Einheimischen Nadler.

Max Weber hat die Verhältnisse der Landarbeiter analysiert und kam dabei zu dem Schluss, dass sie elender als die elendesten Industriearbeiter leben. Nadler lässt seinen Knecht Strobel sehr hart arbeiten. In diesem Punkt trifft sich Seghers' Darstellung mit der Analyse Webers. Wegen seiner harten Arbeitsbedingungen und der sozialen Ungleichheit interessiert sich Strobel für den Kommunismus.

Im Wahlkampf für die Präsidentenwahl am 3. März 1932 wird ein KPD-Plakat an Nadlers Scheunentor geklebt mit dem Satz: „Wer Hindenburg wählt, wählt Hitler.“ Später stellt sich heraus, dass Strobel es angebracht hat. Er vertraut auf den utopiebewussten Kommunismus. Dieses Vertrauen

ist eines der Themen dieses Werks. Strobel wird schließlich von Nadler und der in der SA organisierten Dorfjugend grausam umgebracht. Soweit scheint es, dass der Nazismus über den Antinazismus und den Kommunismus gewaltsam triumphiert.

Der Politikhistoriker Naoki KUMANO hat die zeitgenössischen Verhältnisse in einem brandenburgischen Dorf der 20er Jahre analysiert, darunter die Strategien der KPD, der NSDAP und der DNVP als der Interessenvertretung der Junker. Die KPD im Berlin-Brandenburg treibt mindestens seit März 1928 Propaganda in dem Dorf. Die NSDAP leitete daraus eine kommunistische Gefahr ab. Die KPD mobilisierte von Beginn an die von der SPD und den christlichen Parteien vernachlässigten Landarbeiter für antifaschistische Aktionen. Im Oktober 1932 traf die KPD die Entscheidung, sich verstärkt in den Dörfern zu betätigen und neben Landarbeitern auch Kleinbauern zu mobilisieren. Seghers' Roman spiegelt diese historischen Umstände recht präzise wieder.

Am 30. Januar 1933 wurde Hitler Reichskanzler und die NSDAP ergriff mit Hilfe der DNVP die Macht. Die DNVP war nicht zuletzt die Interessenvertretung der Junker. Sie und der Reichslandbund (RLB) beschworen eine „kommunistische Gefahr“. Im Roman steht von Ziesen für die Junker. Er ist Mitglied der patriotischen Gesellschaft, deren Vorstand Nadler ist. Die SA und er schlachten Strobel ab, weil er Aktivist der KPD ist. Dieser brutale Mord wird durch von Ziesen gedeckt.

Zwar scheint es so, dass der kommunistische Widerstand in diesem Dorf versagt hätte. Wie der Titel „Die Toten bleiben jung“ ausdrückt, bleiben aber die von Strobel vertretenen Ideen lebendig und stürzen am Ende das Naziregime.

